

教育研究活動

沖縄、里山での実習を通し、人と自然、人と人との 「共生」を体験する

保屋野 初子

はじめに

星槎大学では2019年度から19カリキュラム（以下、19カリ）が導入された。その目標は「星槎の開学の理念に立ち戻る」である。「社会に必要とされることを創造し、常に新たな道を切り開き、それを成し遂げる」という理念を大学において実現するには、カリキュラムを通して個々の学生が実行しなくてはならない。専門家が専門知識を伝える機関として設置されている大学では、教員および各分野間のつながりが希薄で連携も弱い。その弱点を克服すべく、科目どうしを関連づけて体系的に配置することで「統合」的な知識・知恵につなげようというのが19カリであると解釈できる。

本稿では、19カリのねらいを形にする科目群としての実習系科目について取り上げる。そのなかで筆者らが試行する実習の概要と成果、課題などを報告し、星槎大学における実習系科目の今後の展開の参考となることをめざす。具体的には、「地球環境共生実習(2)」の沖縄実習、「共生科学実践特別演習I」の里山実習それぞれに関し、内容、ねらい、参加者の構成、観察された参加者の変化、参加者による成果表現などを通して、異なる人・地域・自然環境が複合され濃縮された環境での体験が生み出す「共生」について述べ、実習系科目の可能性とともに課題を報告する。

1. 分野横断的に学べる実習系の科目

1) 共通専門科目にも実習系科目を設置

19カリの特徴の一つに、実習系の科目が履修しやすく、柔軟に展開できるようになったことが挙げられる。実習系科目は、主に〈共生科学専攻専門科目群〉のなかの「共通専門科目」「環境専門科目」に置かれ、「特別ゼミナール」(共生科学実践演習)、「共生科学特別実践演習」ほかの国内外でのフィールドワーク、「アート・デザイン共生学実習」などの科目が設置された(表1)。カリキュラムポリシーの「共通専門科目を、共生科学専攻専門科目群に開設し、専攻を越えて学べるようにします」に対応し、専門をまたいで「統合」に近づくねらいがある。

上記の実習系科目のなかではとくに、「共生科学実践特別演習」は19カリで新しく設置され、柔軟な展開が可能な科目である。この特別演習ではスクーリングに関して2単位(6時

表 1 19 カリで共生科学専攻専門科目群に設置された実習系の科目

科目群：共生科学専門科目群	2019 年度に開設されたプログラム (開講されなかったものも含む)	単 位
【共通専門科目】		
特別ゼミナール（共生科学実践演習）	レポート攻略、環境教育	2
共生科学実践特別演習 I	里山体験ゼミ / キャリアデザイン・里山しごと	1
共生科学実践特別演習 II	野外実習と安全－箱根の自然に五感で触れよう	2
共生科学実践特別演習 III	モンゴルの遊牧生活から考える地球との共生	4
共生科学実践特別演習 IV		8
アート・デザイン共生学実習 I	アート・デザイン共生学実習 I	1
アート・デザイン共生学実習 II		1
アート・デザイン共生学実習 III		1
アート・デザイン共生学実習 IV		1
課題研究 / 共生レポート I		2
課題研究 / 共生レポート II		2
課題研究 / 共生実習 I	STAR (Study of Trust Achievement-Respect) プログラム	2
課題研究 / 共生実習 II		2
【環境専門科目】		
地球環境共生実習 (1)		2
地球環境共生実習 (2)	やんばる東海岸の海と人から学び「共生」を考えよう	2
地球環境共生実習 (3)	一つの地球で心豊かに暮らす方法を考える	2
環境特別講義		1

注) 13・14 カリでの履修の場合は科目名が異なることがある。

参考資料：星槎大学共生科学部「新カリガイド 科目と教員免許状・資格のご案内」、星槎大学横浜事務局「星槎大学からの重要連絡」(2019 年 5 月号、2019 年 7 月号)

間を 2 日間)、4 単位 (6 時間を 4 日間)、6 単位 (6 時間を 6 日間) というように、2 単位ごとに最大 16 単位 (6 時間を 32 日間) まで設定できる。演習や実習の内容や狙いによっては、短期間で済むものから長期間が望ましいものもあり、それに合わせて単位設定が可能である。これまでの演習や実習の枠を超えて、ヨコタテにさまざまな展開がしやすくなった。

通信制大学の学生にとって、時間と費用がかさむ実習系科目の履修はハードルが高い。旧カリまでは、実習系科目は卒業要件を満たすには不利な設定であったため、履修動機が高まらず、閉講となることも多かった。19 カリでは相互乗り入れができる専門科目に位置付けられたことで、学生が実習系科目を履修しやすい条件がより整えられたといえる。

2) 環境分野における実習の位置付け

筆者が属する環境分野のキャッチコピーは、「通信で唯一！ 実践型の学び」とある。実習系の科目は、実践型の学びを集中的かつ深く掘り下げる可能性を持っていると筆者は考えている。また、環境分野は下記のように、扱う範囲が非常に広大である。

「地球温暖化、生物多様性保全、環境倫理、循環共生社会、原子力と環境、自然災害、森

里川海の管理と地域創生など、私たちの『便利な生活』の裏側で起こっている問題は、身近なものから地球規模のものまで、避けては通れない大きな問題となっています」（星槎大学ホームページ、「共生科学部について」）。それゆえに、アプローチとしては、「人」と「自然」とが共に生きるという視点から多角的に学び、複合的な視点で状況把握・分析・判断することにより、課題を解決する力を身につけること、すなわち、統合的で課題解決型とならざるをえない。しかも答えは一つではない。

実習系科目はまた、6つのディプロマポリシー（学位授与の方針）のなかではとくに、「問題が生起する現場において、専門知や統合知を使い、解決のために実践しようとする気概を持つ」「個人や社会にとって必要な課題の解決のため、自律的な課題探究能力を身につけている」「多様な人々や生命に対して、他者を認め、他者を排除せず、仲間を作るという星槎の三つの約束の精神に則って、共生社会の創造に貢献する姿勢を身につけている」などと深く関係している。

さらに、19カりの環境分野には20近くの科目が設置されたが、それらのなかで最も「実践的」かつ「能動的」な位置に置かれたのが「地球環境共生実習(1)～(3)」である。これらは、新学修指導要領が掲げる「生き抜く力を育む」ための「主体的・対話的で深い学び」を具体的に追求するものであるとも考えられる。環境に関する学びは、たとえそれぞれの分野での見方・知識・情報や処方を入力されたとしても、学び手の生活や生き方において「私はどうすればよいか」を自らに問い、「生き方に落とし込む」地点まで行かなければならない、と考える。実習は、そのための有力な手法であろう。

本稿では、開始からまだ日が浅いが、筆者らが実施している沖縄での実習（沖縄実習とよぶ）と、里山での実習（里山実習とよぶ）について報告する。

2. 沖縄実習「やんばるスタディツアー」

1) 沖縄実習の概要

沖縄実習は、19カりの科目名では「地球環境共生実習(2)」(環境専門科目、担当教員：保屋野・鬼頭)、前カリキュラムである13・14カリでの科目名は「自然環境共生実験・実習」である。沖縄で3泊4日のスクーリングとして実施する。2017年度から3回実施し、うち2017年度と2018年度は「課題研究／共生レポートI」も選択的に併修できるようにした。行先は、沖縄本島北部、「やんばる」と呼ばれる地域で、辺野古新基地建設が進む辺野古崎を含むやんばる東海岸地方が中心である。下記は1回目から3回目の各テーマと主なフィールドである。いずれも4日目は那覇キャンパスでまとめの座学を行う。

1回目 「沖縄の自然保護の現場をめぐる、人と自然、平和との共生を学ぶ」(2017年8月18～21日) 大浦湾ほかやんばる東海岸(名護市)、伊江島(伊江村)、泡瀬干潟(沖縄市)

2回目 「“沖縄の命のみなもと” やんばるで人と自然、平和との共生を考えよう。」(2018年8月27～30日) やんばるの森(国頭村)、福地ダム(東村)、辺野古・大浦湾

ほかやんばる東海岸（名護市）

3回目 「やんばる東海岸の海と人から学び、『共生』を考えよう」（2019年7月22～25日）
マングローブ林（東村）、紅型（びんがた）工房、大浦湾、辺野古、貝と言葉のミュージアム（いずれも名護市）

1回目は、初回らしく無謀に近い大胆な行程だったことは否めない。この回は、星槎国際

2019 星槎大学 沖縄 スタディツアー

やんばる東海岸の海と人から学び、「共生」を考えよう

地球環境共生実習(2)・課題研究/共生レポート
2019/7/22(月)～25(木) [3泊4日]

辺野古新基地の埋立工事が進む沖縄県北部(やんばる地方)の東海岸は、自然海岸、サンゴ群落、ジュゴンやウミガメのえさ場が残る、世界的にも生物多様性の高い豊かで美しい海辺です。人びとは海と山とのあいだの小さな集落でサンゴ礁の海と深くかかわる暮らし・文化・信仰を育んできました。そこを訪れ、話に耳を傾け、対話し、思いを馳せ、基地建設のことも含めて私たちの社会や自分のあり方を見つめなおし、現場から未来に向かって「共生」を考えます

高校生・一般の方も参加OK!!

スケジュール *プログラムは多少変更することがあります

7/22(月) 10:50 那覇空港到着ロビー集合、名護市東海岸へ移動
“知る” 午後 大浦わんさかパークで中野義勝さんの講義「サンゴ礁と沖縄の人びと」
地元のおばあ(高齢女性の尊称)から聞く漁あそびの思い出
夕方～東村・又吉コーヒー園着、屋外で夕食とともに1日のふり返りと翌日予習
海を見晴らすログハウスに宿泊

7/23(火) 午前 やんばる国立公園・慶佐次湾ヒルギ林のマングローブ林歩き
“体験する” 藤崎真紅型工房で琉球紅型(びんがた)の話を聞き、紅型染めを体験
午後 大浦湾内でグラスボートに乗りサンゴ群集を観察
夕方～名護市街地のホテルに宿泊、1日のふり返りと翌日の予習

7/24(水) 午前 北限のジュゴン・チーム・ザンの鈴木雅子さんからジュゴンの現状について聞く
“考える” 辺野古テント村で浦島悦子さんの講義「やんばるの地域と基地」
午後 貝と言葉のミュージアムで名和純さんから「沖縄のゆり上げ貝」の講義、瀬高の浜歩き
那覇市に移動、市内ホテルにチェックイン後、自由行動

7/25(木) 星槎大学那覇キャンパスで講義(保屋野)、ディスカッション、発表
“まとめる” *履修登録者以外は自由参加

問い合わせ・申込先:090-5782-8770 h_hoyano@seisa.ac.jp(保屋野)
詳しくは裏面をご覧ください

図1 2019年の沖縄実習のチラシ(表面)

高校沖縄学習センター・那覇校からのべ二十数名の高校生と引率教員の参加もあり、参加者全員にとって睡眠不足と体力勝負のスタディツアーとなった。その反省を踏まえ2回目からはフィールドを「やんばる」地域に絞り、森と海を巡った。それでも訪問先数と移動距離から時間的にはタイトであった。そこで、フィールドをやんばる海岸地域に絞り込み、海岸に沿って南北・西へも移動しながら、海と人とのかかわりについての歴史と現状を知れるように組んだのが3回目である。このように、行程一つとっても試行中である。

主な訪問先・フィールドを「やんばる東海岸」としている理由を、3回目のチラシ（図1）の文言によって紹介したい。

「辺野古新基地の埋立工事が進む沖縄県北部（やんばる地方）の東海岸は、自然海岸、サンゴ群落、ジュゴンやウミガメのえさ場が残る、世界的にも生物多様性の高い豊かで美しい海辺です。人びとは海と山とのあいだの小さな集落でサンゴ礁の海と深くかかわる暮らし・文化・信仰を育んできました。この地域を訪れ、話に耳を傾け、対話し、思いを馳せ、基地建設のことも含めて私たちの社会や自分のあり方を見つめなおし、現場から未来に向かって『共生』を考えます。」

冒頭で辺野古新基地にふれているため反戦・平和運動ツアーと思われやすいが、そうではない。今日の問題を知る・考えるにおいても、やんばる東海岸を森から海、海岸沿いに点在する集落を訪ね、話を聞き、地域特有の地形や自然環境とそこで培われてきた暮らしや文化をもった「地域」の視点を獲得することが重要であり、そのような機会を提供することがこの実習の目的である。資料は毎回、独自のものを手作りして参加者に配布している。

2) 実習の核心となる大浦湾の観察

1回目から欠かさず通っているフィールドは、大浦湾である。この海に出たくて実習に参加する人も少なくない。大浦湾は、辺野古崎北から陸に向かって深く切れ込んだコンパクトな湾だが、海底、海岸線の地形が複雑なことから多様な生態系が存在する。湾に注ぐ大浦川の河口干潟マングローブ、湾浅瀬の大規模なウミクサ藻場（もば）、沖に広がる泥場や砂地、湾内にアオサンゴ群集などのサンゴ礁。この湾で確認されている生物は5,334種、そのうち262種が絶滅危惧種だが、新種も次々と“発見”される。生物多様性のホットスポットであり、そこには沖縄本島最後の大規模ウミクサ藻場をえさ場にする天然記念物のジュゴンが寄り付き、絶滅危惧種のウミガメ類が産卵のために上陸していた（日本自然保護協会、2019）。

本土復帰後、海浜開発が進んだ沖縄本島にあってこれだけの生態系が残るのは、やんばる東海岸の開発が遅れたためである。しかし、2018年12月から、この湾入り口にあたる辺野古崎地先に大量の土砂投入が開始された。辺野古新基地建設工事である。それ以降、少なくとも3頭が確認されていたジュゴンはこの海域に姿を見せなくなり、1頭は西海岸で死体で発見された。最近、IUCN（国際自然保護連合）は沖縄周辺のジュゴンを「絶滅の一步手前」と認定した。

実習では、地元NPOが運営するグラスボートに乗船し、大浦湾に出る。サンゴスポットをよく知る船長とインストラクターのもとで、世界的にみても最大級という巨大アオサンゴ

群落（横 30 メートル、縦 50 メートル、最大高さ 18 メートル）や巨大なテーブル状のミドリイシサンゴなどを船底から覗き込んで観察する。遊泳する魚はもちろん、偶然横切るウミガメを高校生が見つけたこともある。装備をして軽い海中遊泳を楽しむ参加者もいる。約 1 時間の、大浦湾を知る・体感するプログラムである。

わずか 3~4 キロメートル先、立ち入り禁止のフロートの向うでは新基地建設工事が行われている。2018 年の実習までフロートはあっても土砂投入はなかった。2019 年の実習では、工事用土砂を運搬する台船や戦艦のような監視船が浮かび、巨大なクレーンが動き、槌音が響く工事の海に変わっていた。

3) 地域と海との多様なつながりを知る

初回、大浦湾より北上した浜辺集落に住む 90 歳ちかい「おばあ」（沖縄で長寿の女性を指す尊称として使用）の話聞いた（写真）。集落の前庭のようなサンゴ礁の海でのタコ獲り名人だったという彼女には海の思い出を話してもらおうと依頼していたが、高校生や大学生が参加していたせいか、話題は沖縄戦の体験談が中心になった。17 歳で動員されて行っていた伊江島で米軍の艦砲射撃が始まったときに命からがら脱出し、何日も山中をひとり歩き続けてやんばるの故郷に戻った話、占領軍による山中の収容所のようなすなどだ。夕暮れの浜で参加者たちは息を吞んで聞いた。

おばあの話は残念ながらこの回だけだったが、サンゴ礁についての地理学的な解説や漁、



「ジュゴンの見える丘」からの眺望 大浦湾のサンゴ群集観察 浜でおばあの話聞く



やんばるの森のトレイルウォーク 瀬高浜での貝殻拾い 辺野古テント村で話を聞く

写真 沖縄実習でのフィールドワーク（2017~2019 年）

地域の海となりわいの歴史、ジュゴンとのかかわり、昔の子どもの遊びや民具などのこと、ニライカナイ信仰のこと、基地のあゆみなど、さまざまな角度から地域と海とのかかわりについて、回ごとに詳しい人たちから話を聞いてきた。

2019年の実習で初めて訪れた私設資料室「貝と言葉のミュージアム」での貝殻の学びは、印象に残るものとなった。大浦湾奥の瀬嵩浜（せだけはま）ほか全国の渚にゆり上がる（打ち上がる）貝殻の収集・分類・展示と教育を行う、小さくてユニークな資料室だ。展示された多種多様な貝の美しさと分類の見事さ、物語のように語られる解説を聞いたあと浜に出て貝殻を拾う。集落の聖地・御嶽（うたき）の森のすぐ前に浜がある。博物館の名和純さんの説明によると、狭い浜に600種以上もの貝が打ち上がるのは、湾入り口（地元では「クチ」と呼ぶ）の海底深くを潮流とともに真砂（まさご：非常に粒径の小さな砂）と多様多数の貝が湾内に入り、貝殻となったものが浜に打ち上がる。その流れはニライカナイ信仰の神さまの通り道でもあるという。その「クチ」が半ば閉じられようとしていることの意味が伝わる語りであった。

4) 参加学生の学びの成果

通信制大学で、実習系科目の履修者・参加者を集めることは最初の難関だ。沖縄実習の場合も、2016年に閉講となった反省から2017年は担当者が自前でチラシを作り、プリンターでプリントしてつてのあるところに配り、知人たちにメールで案内を送るローラー作戦をとらざるをえなかった。そのとき、1人の学生Aさんが大学に申し込んできた。星槎国際高校の卒業生で正科生として学ぶ学生だ。会ってみると「いま環境に興味があります」と言う。Aさんのためにもなんとか一回目を実現させたい、それが筆者の原動力となった。その後、参加者が集まってきて、沖縄在住の学生1名も含め8名の参加申込者を得て実施できることになった。さらに、沖縄の星槎国際高校の先生がたの並々ならぬ尽力があり、高校生・卒業した大学生たちも参加したので、若者が多いフィールドツアーが実現した。

ここで、前述のAさんが科目修得試験として書いたレポートの一部を紹介したい。フィールドで見聞きしたことをほぼ正確に記述し、「絶滅危惧種」をキーワードに考えを述べる。

「山と海の間での恵みで生命は生かされている社会で、人間の営みである開発技術が進んでいく現状、そういった圧力をかけられることで、生物が絶滅していく背景でジュゴン以外の生き物も減少していると見られる。新基地建設のため海域調査で沖縄近海では絶滅したと思われるジュゴンが発見されたと講義で習った。考えられることは、米軍基地の建設計画が進められていることで、ジュゴンの生息も途絶えたのだと思う。そうだとしたら、基地を受け入れたことじたいが、自然破壊につながるくらい相当の罪になるものなのである。」（原文のまま）

泡瀬干潟のトカゲハゼ、クロツラヘラサギなどが埋め立ての進行によって絶滅に瀕していることにもふれ、そうした生き物たちに強い「共感」をもち、今後の課題は、「現代の子どもたちに海の自然や生物に対して、『こういった行為が生命を傷つける』ということを身に染みさせること」だと締めくくった。

Aさんは現在、卒業制作に取り組んでいる。テーマは「ヤンバルの心」だという。

5) 課題研究／共生レポートIから

2017年の沖縄実習からは、単位取得上の便宜と学修を深化させるための「課題研究／共生レポートI」の併修を推奨している。これまでにこれを併修したのは2名である。

2018年に、「沖縄で出会った人々を通じて、人と自然とのかかわりについて考える」を提出した学生は、それより十数年前に家族と訪れた沖縄で目にした浜辺のゴミを見て、「私達のような観光客が沖縄の自然破壊者になっているのではないか」と感じ、以来、沖縄から遠ざかっていた。この実習では本来の沖縄を見ることができるとは思い参加することにしたという。レポートは、各講師から人と自然とのかかわりについて学んだことを報告したうえで、沖縄について自身が読書した、司馬遼太郎から言語学者・外間守善、本実習講師の著述家・浦島悦子などの著作を紹介しつつ沖縄の文化やアイデンティティ、それらと基地問題との関係について述べる。そして、沖縄県がなぜ辺野古新基地を受け入れたのかという疑問を仲井間知事時代の福知事・高良倉吉の編著から探る。「何故、結論を急いだのだろうか。沖縄の文化を守りたいといいつつも、その文化を形作っている住民や自然に対する配慮を欠き、沖縄の住民ははじめ辺野古を自分達のこととして思う全国から寄せられた意見を参考にしようもしない。この姿勢は今の混乱の一端を作ったといえるのではないだろうか」という結論を導いている。

この学生は、4か月をかけて上のようなレポートを書き上げた。実習がめざす、深く実践的な学びを成果として残してくれた。

もう1人の履修者は、2019年に本土から参加した会社員兼自営業の学生で、「沖縄辺野古基地建設に物申す」というやや過激な題名のレポートを書いた。それによると、辺野古新基地建設における陸上および海上の民間警備費は、2015年から2018年までの約3年間で272億円、1日あたり約2,500万円が投入され、入札参加業者も1社か2社しかないなどの事実を調べ、防衛省沖縄防衛局は国民に見えない場所で過剰に警備員を雇い税金を警備会社等へ支払っているという問題点を指摘する。また、大浦湾の「クチ」を塞ぐ埋立工事が進めば、湾内外の循環が弱まり、デリケートな海中の生態系は短い期間で破壊が進行するだろう。それはゆり上がる貝がすでに減り始めていることにも表れていて、貝の叫びが聞こえるようだ。税金の使われ方、環境影響から見た沖縄での政治的・環境的「共生」は成り立っていない。辺野古新基地問題は、沖縄県民だけの問題でなく日本国民の問題である。一人一人が沖縄の環境問題と政治問題に関心を持って物を申し続けることが大切である、と結論づけた。彼は、辺野古埋め立て土砂の碎石山近くの土砂積出港で、100人ほどの民間警備会社警備員の「カベ」を偶然目にして衝撃を受け、そこから辺野古問題に対する見方を変えたようであった。現場との「偶然の出会い」も学ぶ力となる例である。

3. 里山実習「里山体験ゼミ」／キャリアデザイン・里山しごと

1) 里山実習の概要

里山実習は2019年10月に初めて実施した。主旨をチラシの案内文で紹介する。
 「長野県最北の山間の小さな集落に移住した若い人たちのガイドのもと、里山とはどんなところか、どんな暮らしをしているのか、どんな仕事があるのかなど、見たり聞いたり身体

参加申込み受付中
 共生科学実践特別演習Ⅰ
里山体験ゼミ / キャリアデザイン
 2019年10月4日(金)～6日(日)
 長野県小谷村大網地区

長野県最北の山間の小さな集落に移住した若い人たちのガイドのもと、里山とはどんなところか、どんな暮らしをしているのか、どんな仕事があるのかなど、見たり聞いたり身体を動かし味わたりして体験的に楽しく学ぶフィールドワークです。収穫の秋、古民家を再生した田舎裏のある施設に泊まり、野菜や豆の収穫の手伝い、薪割り、伐採作業、教わりながらのとち餅づくり、笹ずしづくり、かまどご飯炊きなど、みんなでわいわいと一緒に体験します。折々の自然とともに生きること、仕事することの原点にふれてみましょう。

※プログラムは都合により多少変更になることがあります。

1日目

13:00-15:45
 オリエンテーション・フィールドワーク
 16:00-16:50
 入浴(姫川温泉)
 17:15-19:00
 実習
 笹ずしづくりと食事・片づけ
 19:15-20:30
 講義
 「ここに移り住んで」
 20:30-21:00
 1日のふりかえりと翌日の予定確認
 21:00-
 自由時間・就寝

2日目

8:00-8:45
 朝食・片づけ
 9:00-11:45
 フィールドワーク
 田んぼしまいと野菜・豆類の収穫
 12:00-12:45
 昼食
 13:00-16:00
 フィールドワーク
 Aとち餅づくり準備
 B伐採・薪割りとちの林、未来の森
 16:00-16:50
 入浴(姫川温泉)
 17:15-19:00
 実習
 かまどごはん炊きと食事・片づけ
 19:30-20:00
 1日のふりかえりと翌日の予定確認
 20:00-
 自由時間・就寝

3日目

8:00-8:45
 朝食・片づけ
 9:00-10:00
 森遊び、塩の道散策
 10:15-11:45
 とち餅つき
 12:00-12:50
 とち餅の昼食・片づけ
 13:00-13:30
 3日間のふりかえり
 13:50-
 帰途・解散

お申し込み方法などの
 詳細は裏面をご覧ください

図2 里山実習チラシ(表面)

を動かし味わったりして体験的に楽しく学ぶフィールドワークです。収穫の秋、古民家を再生した囲炉裏のある施設に泊まり、野菜や豆の収穫の手伝い、薪割り、伐採作業、教わりながらのもち餅づくり、笹すしづくり、かまどご飯炊きなど、みんなでわいわいと一緒に体験します。折々の自然とともに生きること、仕事することの原点にふれてみましょう」。

日程は2019年10月4～6日の2泊3日。長野県北安曇郡小谷（おたり）村の北端、新潟県境にある大綱（おあみ）集落での合宿形式のスクーリングである。新宿から中央本線「あずさ」と在来線乗り継ぎ、約5時間かかる山村集落がフィールドだ。大綱農山村体験交流施設、通称「つちのいえ」に泊まり集落内で実習を行う。科目名は「共生科学実践特別演習Ⅰ」（担当教員：保屋野・三森）で、通称「里山体験ゼミ」または「キャリアデザイン・里山しごと」である。「課題研究・共生レポートⅠ」（共通専門科目）の併修も可能とした。募集対象は、星槎大学在籍者・卒業生、星槎国際高等学校在校生・卒業生に拡げ、定員内であれば一般参加もできる。

この実習は初回にもかかわらず、環境系科目のスクーリングを受講した学生やキャリアデザインの学生ほか9名と星槎国際高校の高校生1名、沖縄・里山実習に協力してくれている工務店（後述）の社員2名も申込み、募集から早期に12名の定員に達した。大学の広報担当者がチラシをデザインし、星槎国際高校学習センターなどに幅広く蒔いてくれたおかげでもある。参考資料としては、共生科学概説（2）のテキスト中の里山に関する部分を使用した。

2) 里山実習のフィールドとしての「大綱」

実習地に選んだ大綱集落は、人口約70人の限界集落だが、そのうちの3分の1強にあたる約25人が移住者という特異な集落でもある。移住者の多くは、集落の廃校となった小学校校舎に1989年から拠点置く非営利の冒険教育機関、公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会の修了生たちだという。修了後もこの地にとどまり、あるいは再び戻ってきて根を下ろしつつある若い人たちだ。その先駆となったM夫妻とK夫妻の2組のカップルが結成したのが「くらして」というチーム。「くらして」は、集落の暮らしを残すこと、伝えることを目的に、田畑仕事、山仕事、栃餅づくり、炭焼き、狩猟、つちのいえの運営などを行っている。さらに、大学のゼミなどに実習プログラムを提供する。

この集落の存在を教えてくれたのは、長野県を拠点に国産材と自然素材にこだわりぬいた家づくりをする工務店社長のOさんである。日本の森の再生をめざす同社は「くらして」の森林整備を支援し、毎秋子どもたちに森遊び体験イベントを共催する。Oさんは沖縄実習にも「社員研修」として社員連れで参加してくれている。筆者が大綱を初めて訪れたのは2018年夏。掌にすっぽり収まるようなコンパクトな集落のたたずまい、そのまん中に民家を再生した「つちのいえ」があり、つちのいえの中心には囲炉裏と薪ストーブがある。そこで出会ったM夫妻、K夫妻は子育てしながら里山暮らしを成り立たせ、アウトドア・インストラクターのスキルをもち、プログラムの提供もできる。伸縮自在の滞在型実習の受入れの可能性もありそうだ。こうした条件が、大綱が里山実習のフィールド適地であると判断した理由である。

表2 「里山体験ゼミ／キャリアデザイン・里山しごと」のプログラム

1日目：10月4日（金）		2日目：10月5日（土）		3日目：10月6日（日）	
糸魚川線平岩駅集合 移動（車）、部屋割	12:30 12:40 -13:00	かまどご飯炊き・食事 片づけ・掃除	7:30 -8:45	かまどご飯炊き・食事 片づけ	7:30 -8:45
オリエンテーション 森遊び・集落内歩き	13:00 -15:45	田んぼしまい作業	9:00 -11:45	とちの巨木の森歩き	9:00 -10:00
笹ずしづくり	16:00 -17:00	昼食・片づけ	12:00 -12:45	とち餅つき・とち餅 大福づくり	10:15 -11:30
入浴（温泉）	17:15 -18:00	山仕事・薪割り	13:00 -16:00	昼食・片づけ・掃除	11:45 -13:00
用意・食事・片づけ	18:15 -19:10	入浴（温泉）	16:00 -16:50	3日間のふりかえり （科目修得試験）	13:00 -13:20
くらして：「ここに 移り住んで」	19:15 -20:30	かまどごはん炊きと 食事、片づけ	17:15 -19:00	解散	13:30
1日のふりかえりと 翌日の予定確認	20:30 -21:00	1日のふりかえりと 翌日の予定確認	19:30 -20:00	帰路移動	
自由時間・就寝	21:00-	自由時間・就寝	20:00-		

2019年度の実施のため、キャリアデザイン・プログラムを担当する三森睦子先生に声をかけ、2月に雪景色の大綱に打ち合わせに行き、共用プログラムで実施することにした。

3) 「協働」体験から参加者が得たもの

里山実習の参加者は10代、20代が多かったが、30代、40代、50代と各年代にまたがり、男女6名ずつの構成となった。属性もさまざまなメンバーが一つ屋根の下で「合宿」し、「くらして」のスタッフの話を聞き、教えてもらいながら食・住・労を共に体験した（表2）。3日目、すべてのプログラムを終えたところで履修者・非履修者含めた参加者全員に「科目修得試験」として次の項目について、理解したこと、感じたこと、考えたことを書いてもらった。(1) 食を食べること、(2) 仕事をする、(3) 共にいること・はたらくこと、(4) その他。興味深い回答が多く、すべてそのまま紹介したいが、紙幅の都合で以下にまとめて紹介する。

- (1) 「食を食べること」を通じたつながり感覚、労働との関係、地域性への気づきや再発見
- ・おいしさ、楽しさ、ゆたかさ、満たされ感、食事づくりに参加することや仲間と一緒に食を食べることによって生まれる。食を食べることによって生まれるコミュニケーションの大切さ。
 - ・人も“一つの”命であり、命のあり方として特別なものではなく、命をもらって生きる命の一種である。
 - ・田植えに始まり草を肥料とし、苗を植え、秋に刈り取る。それがこの自然界で苦勞して行われ、私たちが生きるための米ができることの再認識。
 - ・栃の実ひとつとっても、季節と向き合い長い下処理作業がある。この長いスパンの作業

を経験するだけでも日々の食、その始末の何たるかについて理解が深まる。

- ・この土地に根付いている先人たちの知恵。笹寿司の抗菌作用や調理法、食材の使い方などの発見、労働の後のご飯はとてもおいしい。

(2) 自身の仕事観へのフィードバック

- ・多種多様な仕事があり、その仕事を楽しんでいる人がこんなにいる。自分のなかで模索していかなければならない。
- ・「生きるために働く」ことが、これからの就活、就労の課題。命や自然との営みを仕事にすることと、自分のライフスタイルとの折り合い。
- ・仕事はとても大変だなと感じたが、都会とは違い、みんなが仲良く協力しあっている。
- ・ご飯を運んだり、配膳したり、食器を洗ったりした。一番頑張ったのは木を伐ることと薪割り。ちゃんと最後までできてうれしかった。
- ・斧を使って木を倒した。いつもできないことが学べた。
- ・食べるための仕事、山を守り自分の集落を守るための仕事、暖をとるための仕事…仕事で得られるものはお金だけじゃない。
- ・米作りの手伝いや杉の伐採の共同作業を通して、協力したり、はげましたり、話したりすることで生まれた連帯感や安心感、人の温かさや力強さ。
- ・僕は極度の上がり症で人に話しかけられたりするのが苦手だが、働いている時もほめたりほめられたりと共により関係が作れた。
- ・実習中、一人でできることは何もなかった。お互いにあるものを補い合いながら働いていることに気づけた。生きていくことは、すべて共にいることで働くことなんだ。

(3) 共に生きること、共同体についての理解や気づき

- ・日々の暮らしの営みが、心をつくり、からだをつくり、共同体の精神を作っている。自然のサイクルのなかで、集落の関係性のなかで、お互いの関係のなかで、生が育まれている。たとえば木を切る斧に刻まれた「お神酒」の意味や四大元素への畏怖や敬意。
- ・プロなら20分で1本の木を処理できるところを今回18名余で2時間近くかかった。目標に向けて多様な参加者の取り組みを見守る余裕こそ教育における有効な作業となりうる。
- ・『村残し』という言葉を知った。集落の文化や伝統、神事や暮らしを残しつつ、そこで暮らす人の生活を探り入れ、移住者が大切な価値を次の世代に引き継ごうとしている。
- ・家族という単位が、働くことを含めて共に生活圏の中心にある。
- ・この村には団結というようなものが強くある。他の人と協力していろいろなことをする。
- ・入会の権利化による共有地の問題を聞き、現実的な課題の存在を知れた。
- ・水災や雪災で隣の人が亡くなる、ご高齢で村の人が減っていく、そういった命の動きが身近にある場所で今一度“自然の中のヒト”を感じた。
- ・人の生き方を伝える大事なものがここにはある。動物、植物、人も同じ。生きるために何かの死に必ず直面する。生きるも死ぬもすべてが凝縮して大綱にある。

(4) 一人ひとりが抱いた感覚や変化

- ・みながどんどん生き生きと輝きだし、相互に関わりあう姿に感動した。



おばあちゃんに教わり笹ずし作り



食器洗いも共同作業



朝はかまどご飯炊きから



田んぼしまいは藁の肥料蒔き



力を合わせ1本の木を伐り倒す



冬の暖房用の薪割り



桁の巨木の森での観察



栢餅つき 栢餅大福を丸める



大家族のような毎食事

写真 里山実習での体験

- ・この辺はとてもいい匂いがした。自然の獣の匂いが僕の心をいやしてくれた。また景色もよくて温泉も気持ちよく、山がとても高く崖があり怖かった。
- ・木がいっぱい生えてるところに行ったとき、とても落ち着いた。
- ・木の冷たさやぬくもり、土のふかふかとしたやわらかさ。木を切るときの一振り一振りから木の片が飛び、その木片のみずみずしさに生命を感じた。感謝と豊かさ。
- ・空気はよく、食事もおいしく、人らしい人がとても多くいる。また、何もないのが素晴らしい。
- ・先人たちの守ってきた素晴らしいものを残すため、子供たちに故郷を残すため、という強い意志が素晴らしい。みなさん生き生きしている。
- ・実習の間、自分の体調と向き合って生活できた。農作業に参加したいから10分だけ横になって休むなど、自分の身体をよく理解して無理なく、とても楽しく過ごせた。

以上からうかがえるように、参加者一人一人が得たものは幅広く、深い。わずか2泊3日の協働の体験から命、生、自然、死のつながりまで感じ取る感性に驚くとともに、企画者が実習にひそかに託した「ふくよかな生の感覚」は一人一人のなかに深く潜在していることを教えられた。参加者たちの、次への要望も記しておく。炭焼き、雪よけ、田植えなど四季に応じての体験、製材やみらいの森整備、祭りへの参加、地質・生物の専門家が防災もふまえて地元の人にも公開した学習の機会、バーベキューや焚火、料理を教わる、季節の行事や移り変わる風景にふれる。なかには、死を自然に受け止められるようなプログラムがあると面白いという要望もあった。

4. “まぜこぜ集団” ゆえに生まれる「共生」

実習は、プログラムはあっても、その時その場かぎりのライブな「学びの場」、生き物である。そのときの構成メンバーの組み合わせによる偶然性はとくに大きい。沖縄実習、里山実習ともに、参加人数は少ないながらもその構成メンバーは多様である。星槎大学の学生の構成が多様であることに加え、一般の人も加わることでさらに“混成”あるいは“まぜこぜ”な参加者構成となる。両実習を通してこれまでの参加者の年代幅は10代(保護者または教員同伴)から60代後半まで、属性は生徒、学生、無職、会社員、定年退職者、会社経営者とその社員、主婦、本大学教員などと幅広い。

こうした「同質でない集団」が同じ体験をすることで生じる化学反応のようなものは、プログラムの内容以上に偶然の采配もあり実習の効果を左右する。これまで企画者として観察したところでは、とくに他者とのコミュニケーションを不得手とする若者にとって、より効果が大きいように思われる。面倒見のよい大人たちや社会経験豊富な年配者たちが、そうした若者を許容して見守り、必要ときに手を差し伸べる。その若者は安心して自分を解放し、自分らしくふるまうことができ、学ぶ楽しさを体得できる。また、その若者と同年代の参加者によっても、互いを励みとし意識することで自分の力に変えていくことができる。一般的に、他者との意思疎通が苦手な子たちは、こうして自分が認められる経験のなかから自信を得てようやく、他者を認め、集団に貢献しようとし始めるのではないか。そのきっかけを実習が与えられたならいい。

また、自然も含めた「他者との出会いと発見」も重要である。沖縄実習では、沖縄在住の参加者と本土からの参加者、同じ沖縄でも異なる街の人や土地との出会いがある。「県内、県外の人の視点の差から当たり前すぎて気づかなかったものに気づき、改めて沖縄の素晴らしさを実感できた」「辺野古の埋め立てに県は反対しているのに泡瀬干潟の埋め立ては推奨していることに、とても驚いた。また、沖縄以外の県でも埋め立てをしていることを知った」。普天間市に住む大学生は、辺野古を訪れてみて「普天間から基地がなくなってほしいけど、この地域の人が同じ苦しみを味わうことは嫌だ」と話した。

実習企画者としては、押し付けない、見てもらう、感じてもらう、考えてもらう、そこから日常につなげてもらえればなおよし、を今後も貫こうと考えている。

5. まとめに代えて—今後の課題

沖縄実習、里山実習ともにいまだ試行錯誤段階にある。それでも「主体的・対話的で深い学び」に寄与する手ごたえを感じている。後付けではあるが、それぞれの学びのキーワードについて考えた。沖縄実習は「共感」、里山実習は「協働」である。「共生」を科学し、考え、そうした社会を創り出すことに貢献するという大学の理念にも沿うものではないかと考えている。

ただし、実施上の課題は多い。この実習にかぎらず、履修者をもっと実習に関心をもち積極的に参加できる条件をどう整えたらよいか。企画・管理側にとって労力、悩みも多々ある。具体的には、広報、金銭管理、価格設定、移動手段・宿泊所・人員などの手配、リスク管理、評価のしかた、成果の表現方法、事後の展開などなど。旅行代理店と提携する方法も課題解消に役立つかもしれないが、コンテンツがほぼ大学の企画者側にあるわりには実習費が高めになってしまうという問題がある。大学としての実習系科目のインフラ整備が必要ではないかと感じている。また、こうした学びのあり方や効果について教育分野から研究してもらえたら心強いとも感じている。

参考文献

- 公益財団法人日本自然保護協会, 2019, 「辺野古・大浦湾 生き物たちの物語」, <https://www.nacsj.or.jp/2019/0/17630/>, (2019年12月22日取得).
- くらして, 2019, 「くらして」, <http://kurashite.com/>, (2019年12月24日取得).
- 星槎大学, 2019, 「星槎の心・理念・設立趣旨」, <http://seisa.ac.jp/about/philosophy.html>, (2019年12月24日取得).
- 星槎大学教育改善室, 2019, 「ここがスゴイぞ! 19カリ」(パワーポイント資料).
- 星槎大学共生科学部, 2019, 「新カリガイド 科目と教員免許状・資格のご案内」.
- 星槎大学授業プログラム資料集, 2017, 「沖縄の自然保護の現場をめぐり、人と自然、平和との共生を学ぶ」.
- 星槎大学沖縄スタディツアーのための基礎資料集, 2018, 「“沖縄の命のみなもと” やんばるで、人と自然、平和との共生を考えよう。」.
- 星槎大学沖縄スタディツアーのための資料集, 2019, 「やんばる東海岸の海と人から学び、『共生』を考えよう」.
- 星槎大学横浜事務局, 2019, 「星槎大学からの重要連絡」(5月号、7月号).
- 私設資料室 貝と言葉のミュージアム, リーフレット.